

平成25年度

「高志の国文学」情景作品 コンクール入選作品集



主催

富 山 県
富 山 県 教 育 委 員 会
富 山 県 中 学 校 文 化 連 盟
富 山 県 高 等 学 校 文 化 連 盟

平成26年1月発行
平成25年度「高志の国文学」情景作品コンクール入選作品集
編集・発行／富山県教育委員会生涯学習・文化財室
〒930-8501 富山市新総曲輪1-7
TEL：076-444-3434 FAX：076-444-4434
ホームページ http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/3009/index.html

発刊に寄せて

富山県知事 石井 隆一

近年、少子高齢化や人口減少、グローバル化が進展するなか、「元氣な富山県」を創るためには、次代を担う若者が根無し草とならないよう、自分が生まれ育ったふるさとに誇りや愛着を持ち、家族や地域との絆を大切にしながら、富山県はもとより全国や世界を舞台に、たくましく活躍できる人材に育むことが重要です。

こうした人づくりの一環として実施しているこのコンクールも、今年度で四回目となりました。応募数も年々増え、どの作品も「ふるさと文学」に触れ、富山の魅力や先人の知恵、郷土への誇りが、若者らしい感性で表現された素晴らしいものばかりであり、大変頼もしく感じています。

また、富山ゆかりの文学などを楽しみ、学ぶ拠点として、一昨年七月に開館した「高志の国文学館」は、子どもからご年配の方まで、多くの皆様にご来館いただいております。おかげさまで、昨年末までに入館者数が二十二万人を超えました。

さらに喜ばしいことに、昨年、国文学の泰斗であり、この文学館の館長である中西進先生が文化勲章を受章されました。中西先生には、館長として、幅広い分野の企画展の開催等について、先頭に立って企画運営していただいているほか、「日本の未来を変えていくのは子どもたちだ」とのお考えのもと、全国の小・中学生のための「万葉みらい塾」や高校生のための「万葉青春塾」を精力的に開かれるなど、万葉集の魅力と日本人の心の豊かさを伝えておられます。

ぜひ、多くの中高校生の皆さんに高志の国文学館にご来館いただき、富山の自然や風土の中で生まれた様々な文学作品に触れて欲しいと思います。

終わりに、この作品集をきっかけとして、ふるさとの歴史、文化、伝統への理解を深め、「高志の国」富山県に愛着と誇りを持ち、全国や世界で活躍する人材へと成長してくれることを心から期待しています。

富山県教育委員会 教育長 寺井 幹男

富山県には、四季折々の美しく豊かな自然や風土の中で生まれた数多くの文学作品があります。このコンクールは、中学生・高校生が、富山にゆかりのある「ふるさと文学」にふれ、感じた情景や心情を文芸、美術、写真で表現することで、ふるさとの魅力を知り、愛着や誇りをもつきっかけとなるように、平成二十二年度から始まり、今年度で四回目になります。今年度は、昨年度より約百点多い、一六〇八点の応募がありました。

これからの富山県を担う若い皆さんが、先人の喜び、悲しみ、悩み、感動などを伝えるふるさと文学に接することは、郷土の歴史や文化を再認識し、ふるさとの良さを継承、発展させていくための大切な手立てです。そのため、県教育委員会では、ふるさとを学び楽しむ環境づくり等、「ふるさと教育」の推進に重点を置き、積極的に取り組んでいるところです。

この作品集には、皆さんの仲間たちが、ふるさと文学への感動をもとに、新たな創作に取り組んだ作品がまとめられています。この冊子が、新たなふるさとの良さや魅力の発見につながることを期待します。

今後ともふるさと富山の文学に親しみ、読書活動を深め、自分とふるさと、そしてこれからの人生について考えるきっかけとしていただくとを心から願っています。

入選作品集の利用にあたって

- 入選作品の原作紹介のために、初出の作品に読書案内のコラムがあります。
- 文芸部門については、冊子の構成上、ジャンルごとにまとめて掲載しました。
- 美術部門・写真部門は入選順に掲載しました。
- 入選作品集は、「富山県 生涯学習・文化財室」のホームページからダウンロードすることができます。

文芸部門

知事賞

「納棺夫日記」を読んで

死と向き合う 「納棺夫日記」を読んで

富山中部高等学校二年 加藤 瑞希

「納棺夫日記」。この本のタイトルを見て、映画「おくりびと」を思い出した。その映画を見た時、私は小学六年生だった。幼いながらも、納棺師という特殊なテーマを扱った作品に、強い衝撃を受けたことをはつきりと覚えている。

「おくりびと」の元となった「納棺夫日記」。この作品から、「死は美しい」という印象を受けた。こういうと語弊があるのかもしれない。正確には、「死」への恐怖を失い、「生」への執着を捨てた人こそ美しいと感じた。

読み始めるうちは、作者である青木新門氏の考えがはつきりと理解できなかった。なぜなら、「死」への恐怖を失うことは、いつ死んでもいいということであり、「生」への執着を捨てることは、命を粗末に扱うことだからである。つまり、そのような美しさは、自分の人生をきちんと生きていないように私には思われたのだ。また、私自身、身近な「死」を経験したことがない。そのため、私にとって死はいつも遠いものであり、生きていくことがよく、死んでしまうということは「無」となり悪いものになってしまうのだ。

しかし、そのような考えは読み進めていくにつれて、浅はかなものだと思われかされた。私のような考えは、「死」を表面的にしか見ておらず、勝手な想像で「生」を美化していたのだ。

青木氏の淡々とつづられていく日記と、宮沢賢治や親鸞などの作品を借りた言葉で、改めて「生」と「死」ではなく、「生死」としてその思いをとらえることができた。このような考えは作品中で「みぞれ」に例えられている。

「雪でもなく、雨でもない、手のひらに受けければ水となってしまふ」「みぞれ」ほど無常を感じさせるものはないかもしれない。

このように書かれた「みぞれ」は「生死」であり、一瞬一瞬を静止させてとらえると、

間断なく変化している。それは私たちにとって「生」も「死」もどちらも同じようなものであり、どちらかが速くてどちらかが近い、なんて簡単に決めつけられるものではないということだ。「生」と「死」をひとつの「生死」ととらえ、それらは同じであると気づいた人こそ、その美しさにも気づけるのではないかと思う。

そして、その美しさには「生死」を超越したものがあろう。生きていく間に、その美しさにたどり着いた人は、そうでない人よりも少し日が差し込んだような、ちよっとだけ違う世界が広がっているのかもしれない。

今のわたしにとって、「死」は怖い。自分でも驚くほどに「生」に執着し、けれども、どこか一方でそうではなかったりする矛盾した自分がある。

青木氏は、納棺夫として亡くなった人と向き合うことで「生死」をとらえた。私は、この作品から「生死」について考えさせられた。もっと深くこの本当の意味を理解し、感じ取れたとき、今のような矛盾した私ではなくなるような気がしている。死と向き合い、その裏で「生死」と真剣に向き合うことが私にとって、これからの人生における重要なことなのかもしれない。また、自分が、家族が、大切な人が、同じようにこういった気持で死を迎えられることが一番の幸せなのではないかと思う。



納棺夫日記

青木 新門 / 著 桂書房

死者の体を清め棺に納める仕事に就いた著者が、死にゆく人の穏やかな顔や感謝の言葉に、人間の命の本質を悟っていきます。著者の静かな声が残るロングセラーであり、新たに詩と童話を付した定本として出版されています。

「高校生のためとやまの文学 風はどこから吹いて来る―伏木中学校の歌―」を読んで
「風はどこから吹いて来る」をよんで

富山中部高等学校二年 瀧 萌香

この詩には風が吹いている。

東、南、西の三方面を山に囲まれた富山県。北の海にどのような意味を見つめるか。この詩の中に世界への開かれた扉としての富山湾の姿を見た。その扉の向こうへ風が後押ししてくれるのだ。

そう感じるためには「風」の描写とそこから想像できる役割がとても大切だ。私たちがしばしば本や映画でみる風はとても短い。いわば、通行人Aというところ。主人公の前髪やスカートを揺らしたり、落ち葉をころがしてみたり。風がどこから来て、どこへ行くかなど考えもしない。私たちは風を追いかけられるほど足が速くない。しかし言葉の表現の力で風と並走し、その本来の長さを知ることができたとき、私たちは新しい目を持ち世界のつながりを感じる事ができるのだ。

ではその「言葉の表現の力」とは何か。それは風の流れの過去、現在、未来を丁寧に描くことだ。冒頭であり題名の「風はどこから吹いてくる」で私たちは世界のどこかを想像する。はて、どこだろうかと。その後の「丘を吹く風 海の風」で風が丘をすすると降りて海面をすべっていく。丘の斜面が風に動きを生みだす。そこまでが過去。「港の町に育つ仕合わせは」によって読み手は自分の立つ場所を突然与えられる。風が速度が落ちる。特に「仕合わせ」の部分の運命の重みで。その次の「風の〜マストの鷗とともに知る」で風が自分の体の近くにあることを示す。「倉庫く知っている」では風が糸のようにたくさんの人という名の宝石をつないでいる。ここで私は風の魅力を強く感じた。「あの空でぼくたちはつながっている」とよく言うが空ではだめなのだ。答えは風なのだ。風は肌で感じられ、人と同じ目線で人の生活の間を走るのだ。そして何より何かを動かす源動力を持っている。海をこえ、山をこえ世界中を吹き渡る、風。風に乗って私たちは未来「広い世界」へ行こうと意気込む。

しかし、「たとえ〜羅針盤でびったり」風ぐ。船のマストをふくらます風と対照的

「螢川」を読んで
光

魚津高等学校一年 松井 亜莉沙

「螢が出なかつたら、富山に残る。螢が出たら大阪へ行く」この物語に出てくる千代は、出逢うかどうかわからない一生に一遍の光景に、これからの行末を賭けた。これは千代の人生を賭けたといっても良いだろう。

私がこの本を選んだ理由は、富山が舞台となっている作品の中でも有名な作品であることと、国語の先生がぜひ読んでみたら良いとすすめておられたことで興味を持ったからだ。話の内容を全く知らない状態から読み進めた本ではあったが、ふるさと富山の美しい情景が思い浮かびどんどん引き込まれていった。

この本の中で私は、私を変える一人の女性に出会った。重竜の妻で竜夫の母の千代である。彼女はこの本の中で壮絶な人生を歩んできた。元夫とその子どもとの別れ、重竜との出会い、母の死、そして重竜の死。どんなことがあっても強く生き、子どもを竜夫を女手一つで守り育てようとしている姿に心ひかれた。また重竜が亡くなる直前、千代は重竜の「・・・はる」という小さな声を聞き、重竜の別れた先妻の近況を重竜に話している。

「春枝さんは、商売も繁盛して、しあわせに暮らしとるって・・・。父さん、心配せんでもええちゃ」

自分のことだけじゃない、先妻のことを想い、重竜のことを想っていたからこそ出た言葉である。千代は周りを気遣う優しい心を持った人なのだ。これは私が一番感動した場面であった。

生きることに意味はあるのか。この十六年間、今まで何度も考えてきたことである。大きな壁にぶつかったとき、刺激がない日々が楽しくないとき。中でも将来のことを考えるときに私にとって一番つらい時間であった。大人になってやりたいことがなく夢がない。私は未来を信じていいのだろうか。何度も涙を流してきた。

物語の中で千代は「あの光景」に出逢ったのである。「これまでのことがすべて嘘ではなかった、そのときそのとき、何もかも嘘ではな

な存在として「心の錨」が登場する。風がアクセルなら錨はブレーキだ。どちらも大切である。「心の錨」という表現は、任意の地点にじっくりと心の根をはるようだ。風のように軽々と前進していくことも大切だが、心の錨をおろして、しっかりと自分と向き合い、自分を残すことも必要なのだ。

錨を備えた船は、「さあ船出しよう エンジンかけて」と歌う。富山の海から世界が広がっている。

最後にもう一度「風はどこから吹いて来る」と問いかけられる。この一言でこの詩の世界での「風の循環」が完成するのだ。好奇心が全ての源であり、私たちの船を常に動かしている風は途絶えない。



堀田善衛詩集
 一九四二〜一九六六
 堀田 善衛／著 集英社
 戦時中の騒然たる国家的雰囲気の中で書かれた「祈り」などの詩句を語らう。「祈り」などの詩句から、戦後の「湯の風景」「しづかに雪が」「戦争」「ジェスフィールド公園にて」「暗黒の詠唱と合唱」他一九六六年の「風はどこから吹いて来る」までの全詩作四十二編と解題を収録。

かった。」

どんなつらい過去があってもいつか、あるとき頑張つて良かった、全て無駄ではなかった、そう思える瞬間がくるかもしれない。なにがあっても、たとえ未来が見えなくても前を見つけていけばその瞬間がやってくる、そう信じて生きていくのも悪くないと思った。千代が見たあのとときの螢の「光」を私は今、見ることができない。しかし私は彼女のおかげで未来への希望の「光」を見る事ができたように思う。これは私にとって大きな成長である。前を向いて生きようと心から思った瞬間であった。

千代が見た光景はそれだけではなかった。「螢の綾なす妖光が人間の形で立っていた。」

この本はこの文章で終えられている。この光は何だったのか、それは正確にはわからない。ただ私は、この光は千代がずっと想い続けた人、重竜の「光」であったのではないかと思う。生死を越えた命の輝きを私は感じた。重竜は千代に感謝の気持ちを伝えようとしたのではないだろうか。螢の光を通して重竜は千代に、そして私にも生きる意味を伝えてくれたように思う。きっと千代にも重竜の想いが届いただろう。

これからの人生、たくさんあるはずだ。それは楽しいことばかりではないだろう。しかしそれでも何かを信じて生きることの大切さを教えてくれたのはこの一冊の本であった。私の心の片隅には千代のようにあのとときの三味線の糸の音がつまびかれています。私はこの本に出逢い、そして千代に出逢い、変わることができたとと思う。この出逢いに私は感謝したい。そしてこれから何があっても前を向いて生きていくと誓いたい。

「何もかも嘘ではなかった」

そう思える「あの瞬間」がくるまで。未来への「光」を信じて。



螢川・泥の河
 宮本 輝／著 新潮文庫刊
 昭和三十一年の富山県を舞台に、父親の事業がうまくいかなかった中で、少年の淡い恋の目ざめと人間的成長を描いています。雪国ゆえの豊かな水の描写や、春の喜びとともに螢の乱舞する情景は庄巻、芥川賞を受賞した名作です。

文芸部門・散文 銅賞

『大人になる前に身につけてほしいこと』を読んで
大人になるために

小杉高等学校三年 津幡 実央

私がこの本を選んだ理由は、社会人になる前に少しでも自立した人間になるための、参考にできたらと思っただけです。この本は、筆者の経験を基に、これから大人になる人たちに伝えておきたいことが書かれています。

その中でも特に気になった話がいくつかありました。その一つは、大人になるとは「親から自立」した人間になるということです。このフレーズを読んで私は、確かにその通りだと感じました。なぜなら、社会人として働いていても、身の回りのことができていなかったり、気配りができない人を見ると「出来ない大人だ」と思ってしまうからです。しかし、私もこのまま社会人になってしまっただらきっと同じことを思われてしまうでしょう。だから、私はまず、何でも親に頼らず自分のことは自分ですることから始めたいです。そして大人になる準備をしていきたいです。

二つ目は、「インターネット、携帯電話とのつきあい方」です。最近、ニュースなどで間違ったインターネットの使い方をしてトラブルに巻き込まれている中高生が多いと聞きます。たしかにインターネットは便利である反面、一歩間違えると取り返しのつかない事態に陥ってしまう危険性があるにも関わらず、私たちはそのことを忘れて利用しています。それから、筆者も書いてるように、私たちはパソコンや携帯電話などの道具を使いこなしているのではなく、「使われている」という認識を持つべきだと思います。私自身も道具に使われている状態ですが、道具を使いすぎると、道具に時間をとられ、逆に本当の自由な時間が無くなってしまふと感じました。だから、時間を決めるなどして、インターネットをうまく使いこなせるようにしていきたいと思いました。

三つ目は、「時間を守ること」です。私たちは幼い頃から門限を守りなさい、授業が始まる時間までに教室に戻りなさいなどと言われ続けてきました。当たり前のこととして認識してはいるのですが、気がゆるんでしまふと遅刻してしまふことがあります。今のうちに直して社会に出ても時間を守りつかりと守って信頼される大人に

文芸部門・詩 金賞

『萬葉集』を読んで（大伴家持が詠んだ歌）

悠久のふるさと〜二三首にこめられた富山の自然さち

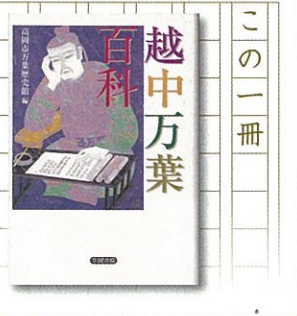
滑川市立滑川中学校一年 吉森 優菜

耳に流れる せせらぎの
その静けさは いつの日か
聞き覚えのある 早月の川

耳にささやく 鳥鳴きの
そのかわいさは いつの日か
聞き覚えのある ホトトギス

目に映る 白波の
寄せる幸せ あをの浦
頬を撫で行く 東風あゆのかぜ

目まなこにうかぶ ふるさとの
その美しさは いつの日も
変わらずに富む 高志の自然さち

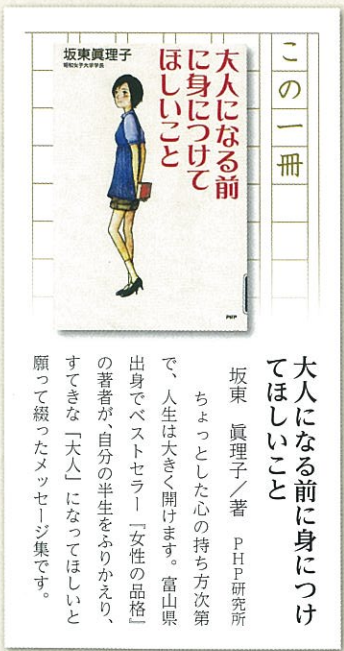


この一冊
越中万葉百科
高岡市万葉歴史館／編 笠間書院
大伴家持らが越中赴任中に詠んだ歌など、とやまに関わる歌とその解説を一冊にまとめました。「万葉集」の中でも、畿外では最多となる三百三十七首の「越中万葉」の文学的価値とともに、北陸の自然にふれて大きく開花した大伴家持の歌作りを解明します。

なりたいたいと思いました。また、筆者は、忙しい人ほど時間をきちんと守っていると書いています。そういう人はきつと時間の大切さを知っていて、常に余裕を持って行動しているのだと思います。私も、計画的に時間を使っていける社会人になりたいです。

四つ目は、「素直な心を忘れないこと」です。これは、人が学習していく上で最も重要なことではないかと思えます。なぜなら、これを忘れてしまうと自分の欠点やアドバイスを聞き逃がすことになり、改善するチャンスを得られないからです。私も、日頃から人の話を聞き入れ自分のものになるように努めています。成長したかどうかは分かりませんが、これからは素直な心を大切にしていきたいです。

この本を読んで、何事もプラスに考えると自分のためになるのだと感じました。以前、美容院に髪を切りに行ったときに美容師さんが、就職の面接試験をするときに、いつも「自分は運が良いと思いますか。」と聞くと言っていました。そしてその質問に運が良いと答えた人は、印象が良いイメージだと言っていたのを覚えていました。やはり、前向きな姿勢を持っている人は良い印象だと分かりました。私はこれから、この本に書かれている事を生かして、前向きで素直な心を持ち、しっかりと時間を守る大人になりたいです。また、それらを社会に出たときの人間関係作り



大人になる前に身につけてほしいこと
坂東 眞理子／著 P.H.P.研究所
ちょっとした心の持ち方次第で、人生は大きく開けます。富山県出身でベストセラー「女性の品格」の著者が自身の半生をふりかえり、すてきな「大人」になってほしいと願って綴ったメッセージ集です。

文芸部門・詩 銀賞

『越中万葉歌』（巻十七 四千）を読んで

変わらないもの
富山高等学校一年 高柳 怜奈

時代が変わり
生活が変わり
人々が変わり
自分も変わりつづける

変化ののちに今があり
変化のさき未来がある

でも変わらないものが一つある

感動する心

立山がくれる感動

その感動は
時間をこえ

つながっていくだろう

文芸部門・詩 銅賞

立山信仰の世界「富山の知的生産」を読んで

祈りの先

中央農業高等学校三年 柴草 美桜

餓鬼となった男がいた

男は地獄の田を幾つも幾つも持った

その田が実ることはなかった

餓鬼となった女がいた

女は弱く 田を持ってなかった

男の餓鬼は女の餓鬼に恋をした

男の餓鬼は田を女へ譲り 女のために耕した

女の餓鬼は男を支え 田を耕す男と笑った

それでも田が実ることはなかった

男は願った 女のために

女は祈った 男のために

二人の姿は鬼ではなかった

二人の場所は地獄ではなかった

文芸部門・詩 銅賞

「万葉集」を読んで

千三百年の景色を

高岡市立伏木中学校三年 蜷川 華乃

目の前の青き青き山

二上の風とともに夏を運ぶ

ほととぎすの歌声に

私は耳をふさいだ

目の前の広き広き海

手で覆っても指の隙間からあふれる

壮大すぎる洪溪の海

清き波の轟きに

私は口を閉じた

目の前の白き白き山脈

神の山脈立山の

美しく輝く御姿

私は眼を閉じた

私の眼では見えないものが見たい

私の耳では聞けないものが聞きたい

私の感情ではないものが知りたい

私は私ではなく

家持の景色が見てみたくなった

文芸部門・詩 銅賞

立山信仰の世界「富山の知的生産」を読んで

因果

中央農業高等学校三年 村上 奈穂

植えども

植えども

稲は実らず

火山のガスに肌がただれ

手足が棒となれども

働くと鬼は言う

働けども

働けども

腹は満たされず

硫黄の臭いに鼻が曲がり

飢えと渇きに苦しめども

因果だと鬼は笑う

文芸部門・詩 銅賞

「富山大空襲・戦争体験記」を読んで

あわれな町

富山市立和合中学校一年 冬木 翔大

西の空が紅に染まり

爆弾が容赦なく降りかかる

家族を失いさまよう兵士や

焼かれて命を落とす子供

あの日の哀れな思い出は

あなたの瞳に焼きつける

そして 憎き爆弾は

幾千もの命を奪い取る

その空間から昇る太陽は

あなたに恵みを与えた

そして彼は静かに目を閉じ

ゆっくり空へと昇っていく

今も自分は

死んだ人々を哀れに思い

彼らに哀悼の意を捧げる



富山大空襲・戦争体験記

富山市民感謝と誓いのつどい

実行委員会／編 富山市

昭和二十年八月一日未明の富山大空

襲の惨禍を戦争体験のない若い人たち

等後世に受け継ぐため、富山市が体験

者から募集し、六十八編にまとめた心

魂迫る体験記です。

文芸部門・短歌 金賞

『蜚川』を読んで
いのちの乱舞

富山高等学校一年 林 聡美

静かなる

青い月下に

降りそそぐ

闇夜のみこむ

いのちの乱舞

文芸部門・短歌 銀賞

『蜚川』を読んで
蛍火も束の間

高岡西高等学校二年 宮原 優香

青白き

命の灯

儂げに

夏の夜を舞う

河の幻

文芸部門・短歌 銅賞

立山信仰の世界『富山の知的生産』を読んで
永遠の欲望

中央農業高等学校三年 栄 真咲希

餓鬼の田や

仏の御声気付かずに

植え続けるは

永遠の欲望

文芸部門・短歌 銅賞

『とべないホタル』を読んで
ひかり

高岡西高等学校二年 前原 彩佳

かわすみの

動かぬひかり

さびしげに

仲間がよりそい

ともにひかる

文芸部門・短歌 銅賞

『劔岳（点の記）』を読んで
劔岳

富山高等学校一年 横山 裕子

堂々と

天を貫き

そびえ立つ

劔の山は

夕日のみこむ

文芸部門・俳句 銀賞

『劔岳（点の記）』を読んで
劔岳に挑む

富山高等学校一年 神島 寛也

雪背負い

前人未踏の

頂へ



日本地図を完成させるため、不可能と言われた初登頂と山岳測量に取り組んだ主人公らの不屈の努力、山を愛する人々の友情を描きます。山頂で発見された千年前の錫杖が解けない謎として心に残る名作です。映画化されました。

文芸部門・短歌 銅賞

立山信仰の世界『富山の知的生産』を読んで
永遠の欲望

中央農業高等学校三年 栄 真咲希

餓鬼の田や

仏の御声気付かずに

植え続けるは

永遠の欲望

文芸部門・短歌 銅賞

『とべないホタル』を読んで
ひかり

高岡西高等学校二年 前原 彩佳

かわすみの

動かぬひかり

さびしげに

仲間がよりそい

ともにひかる



羽が曲がってとべないホタルが仲間たちに助けられ、新しい光を放つ童話です。富山の教員であった作者が、子どもたちに託した願いから生まれた物語は、全国の人々に共感され、感動を呼びました。アニメ化されました。

文芸部門・俳句 銀賞

『とべないホタル』を読んで
とべないホタル

富山高等学校一年 沢田 泰地

夏空に

光り輝く

命の火

文芸部門・俳句 銅賞

『ほしのふるまち』を読んで
私たちの宝物

高岡西高等学校一年 高野 未来

流れ星

夜空の中を
駆け抜ける

文芸部門・俳句 銅賞

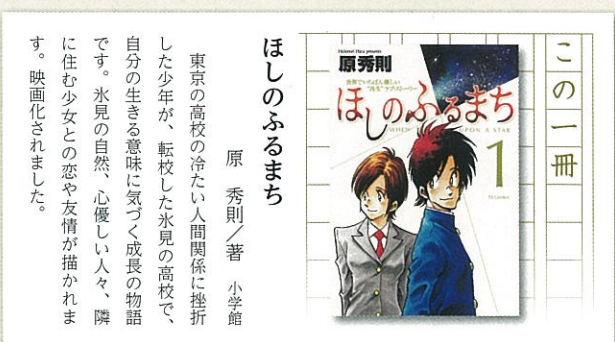
『富山湾を科学する』を読んで
地球の未来

魚津高等学校一年 中野 啓太郎

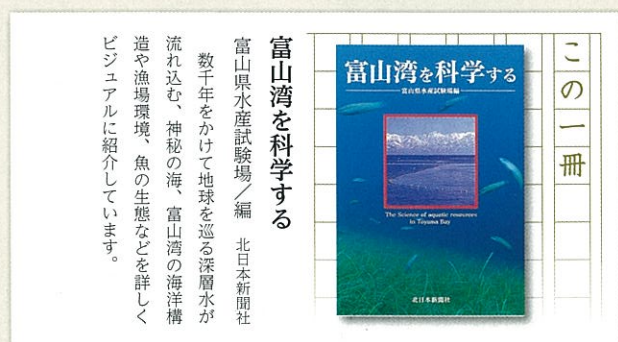
激流に

いどむ私は

黒部鱒



東京の高校の冷たい人間関係に挫折した少年が、転校した氷見の高校で、自分の生きる意味に気づく成長の物語です。氷見の自然、心優しい人々、隣に住む少女との恋や友情が描かれます。映画化されました。



数千年をかけて地球を巡る深層水が流れ込む、神秘の海。富山湾の海洋構造や漁場環境、魚の生態などを詳しくビジュアルに紹介しています。



美術部門 知事賞
「万葉を想って」磯部 遥 (高岡支援学校 2年)
 <万葉集> 550 × 595

【凡例】 部門名
 題名/名前 (学校名・学年)
 < > は原作 サイズ (タテ×ヨコ) mm



美術部門 金賞
「立山の恩恵」橋場 圭 (富山中部高等学校 2年)
 <おおかみこどもの雨と雪> 727 × 606

この一冊
富山県謎解き散歩
 竹島 慎一著 中経出版(旧新人物往来社)
 東・西・南の三方を山岳で囲まれた富山県は、その地形から「天然の円形劇場」と称されます。海山の幸にあふれ、四季のうつろいの美しい越中路を紹介した富山学の決定版。



美術部門 銀賞
「山崎カール」佐渡 涼子 (富山北部高等学校 1年)
 <富山県謎解き散歩> 540 × 380

この一冊
おおかみこどもの雨と雪

細田 守/著 角川文庫

大学生の花は、「おおかみおとこ」に恋をし、「雪」と「雨」の姉弟が生まれます。都会の片隅でひっそりと暮らす四人が、「おおかみおとこ」の死を機に、田舎町に移り住むこととなります。映画原作にして細田守監督初の小説。



美術部門 銅賞
「何かが始まる場所」 浅野 美穂 (富山北部高等学校 1年)
 <ほしのふるまち> 364 × 515



美術部門 銀賞
「立山の夏の雪」 清水 香帆 (志貴野高等学校 2年)
 <万葉集 (巻17-4004)> 380 × 540



美術部門 銅賞
「蛍川」 河崎 希実 (小杉高等学校 2年)
 <蛍川> 515 × 364



美術部門 銀賞
「真夏の浪漫」 早崎 瑞月 (富山北部高等学校 2年)
 <凜々と> 420 × 297

この一冊

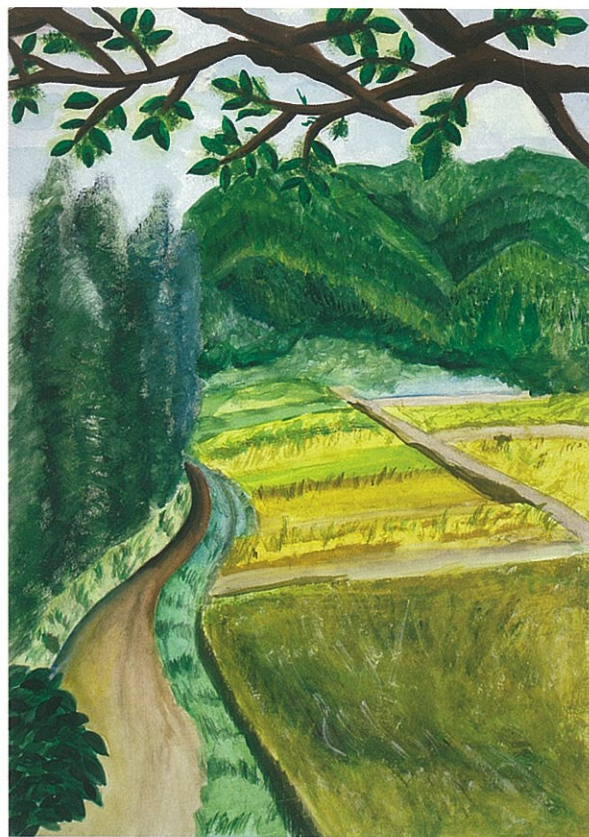
凜々と

矢島 正雄 / 作 NHK

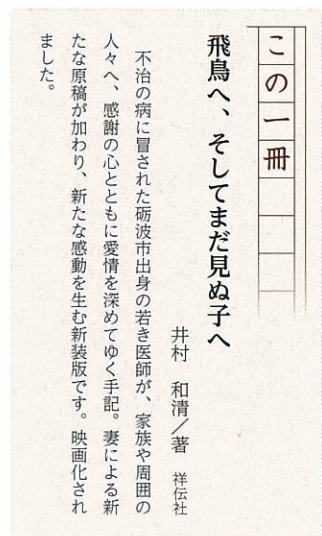
一九九〇年四月二日、九月二十九日に放送されたNHK連続テレビ小説第四十四作。主人公は富山県魚津市出身で、大正時代に上京し、テレビジョンを開発した川原田政太郎がモデルです。



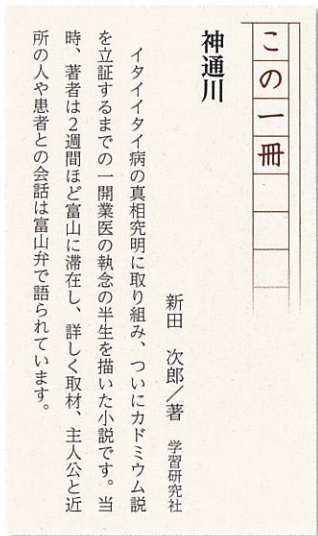
美術部門 銅賞
「ふたり」 高田 康平 (小杉高等学校 1年)
 <蜚川> 544 × 392



美術部門 佳作
「古里の風景」 松井 映里香 (富山北部高等学校 1年)
 <飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ> 544 × 392



この一冊
飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ
 井村 和清 / 著 祥伝社
 不治の病に冒された砺波市出身の若き医師が、家族や周囲の人々へ、感謝の心とともに愛情を深めてゆく手記。妻による新たな原稿が加わり、新たな感動を生む新装版です。映画化されました。



この一冊
神通川
 新田 次郎 / 著 学習研究社
 イタイイタイ病の真相究明に取り組み、ついにカドミウム説を立証するまでの一開業医の執念の半生を描いた小説です。当時、著者は2週間ほど富山に滞在し、詳しく取材、主人公と近所の人や患者との会話は富山弁で語られています。



美術部門 銅賞
「事をなすために」 境 佑莉 (出町中学校 3年)
 <神通川> 540 × 380



美術部門 銅賞
「自然豊かな富山の朝」 山崎 美友奈 (富山北部高等学校 1年)
 <おおかみこどもの雨と雪> 364 × 515



写真部門 金賞
「森の目」木林 瑞貴 (富山東高等学校 2年)
 <とやま面白学・富山の自然再発見> 297 × 420

この一冊
とやま面白学・富山の自然再発見
 とやま面白学企画編集会議／編 北日本新聞社
 富山県民には当たり前でも、実は世界的に珍しい現象、身近な自然の謎が解き明かされます。植物、動物、地学、気象編など、各分野について第一線の学芸員、研究員が解説しています。



写真部門 知事賞
「輝射しーきざしー」稲垣 ゆりあ (南砺福野高等学校 2年)
 <詩集 雪道> 254 × 365

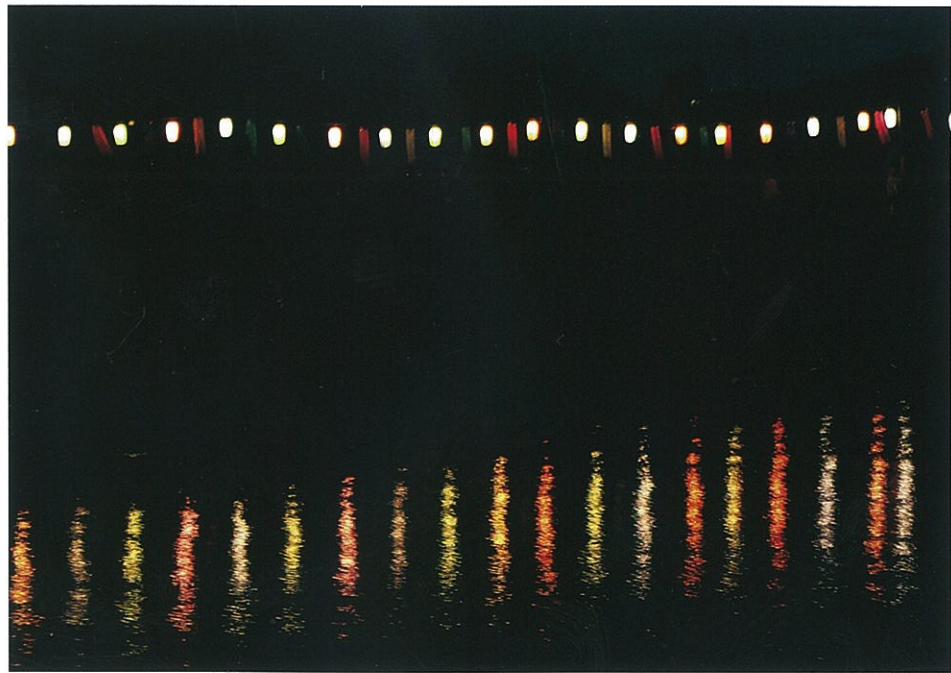
この一冊
詩集 雪道
 青木 新門／著 桂書房
 当たり前前に感じていた雪国の暮らしや、私たちの人生に新しい光をあて、生きる糧を与えてくれる詩集です。平易な言葉にこめられた深い思いと知恵が共感を呼びます。

【凡例】 部門名
 題名／名前 (学校名・学年)
 < >は原作 サイズ (タテ×ヨコ) mm



写真部門 銀賞
「曳山に乗って」 飛弾 彩菜 (富山高等学校 3年)
 <風のまにまに> 305 × 254

この一冊
 風のまにまに
 岩倉 政治 / 著 富山新聞社
 福井の吉崎から始まった蓮如の越中の旅。この跡をたずねた二人運路の独特な絵とユーモラスな文による旅の足跡。富山新聞に連載されました。

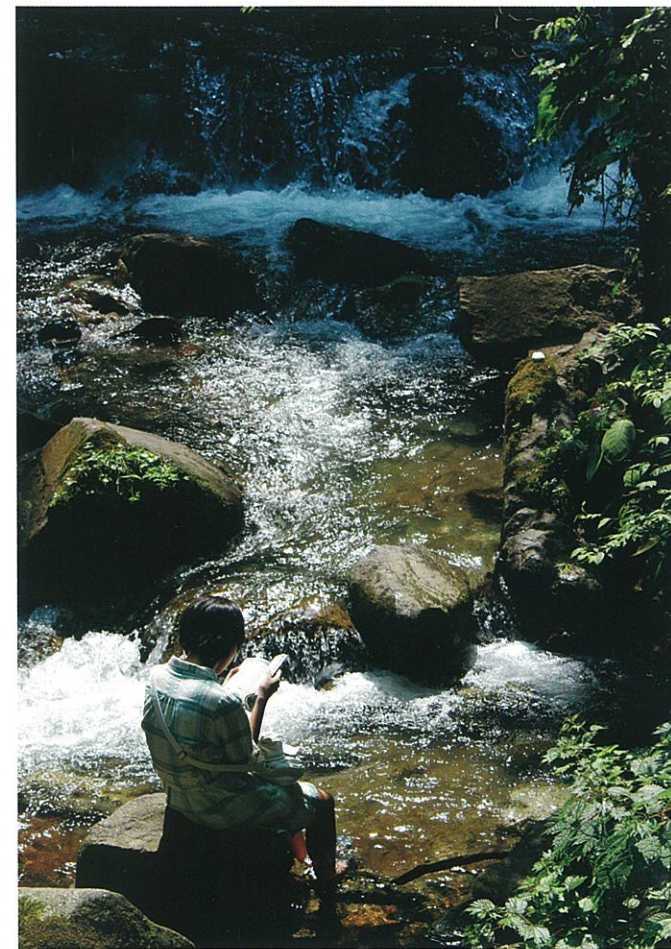


写真部門 銅賞
「光の影」 大崎 葉 (富山東高等学校 2年)
 <螢川> 297 × 420



写真部門 銀賞
「写生の日」 沖野 巽 (高岡第一高等学校 1年)
 <街道をゆく4> 254 × 365

この一冊
 街道をゆく4
 司馬 遼太郎 / 著 朝日文芸文庫
 白川郷、五箇山を北上し、富山に向かう筆者が、自然の姿や人情の機微に感動し、赤尾道宗の生き方等に思索を深めています。

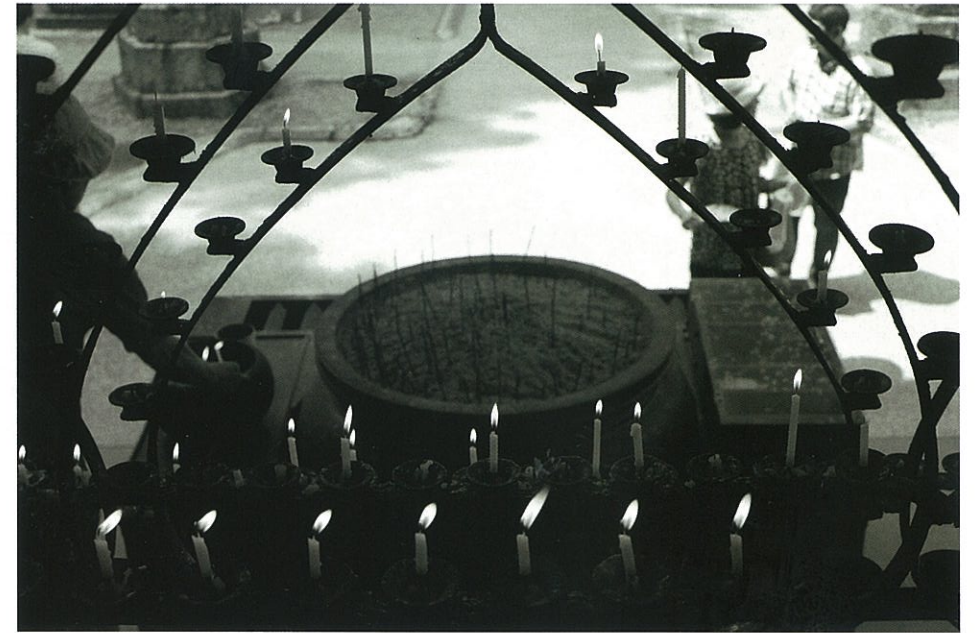


写真部門 銀賞
「文学少女の夏」 亀沢 美葵 (富山東高等学校 2年)
 <越中讃歌> 420 × 297

この一冊
 越中讃歌
 北日本新聞社 / 編 北日本新聞社
 山と水がはぐくんだ土地、越中富山ゆかりの文化人が、愛してやまない、ひと・町・自然・味・くらし・歴史を語る珠玉のエッセイ集です。



写真部門 銅賞
「家族」橋本 花菜 (高岡第一高等学校 1年)
 <街道をゆく4> 254 × 365



写真部門 銅賞
「幻想」鴨島 舞 (富山東高等学校 1年)
 <納棺夫日記> 297 × 420



写真部門 銅賞
「井波のリズム」宮城 健生 (高岡第一高等学校 1年)
 <瑞泉寺と門前町井波> 254 × 365



写真部門 銅賞
「清流の里」島 彩香 (高岡第一高等学校 2年)
 <祭り囃子がきこえる> 254 × 365

この一冊
瑞泉寺と門前町井波
 千秋 謙治 / 著 桂書房
 異国文書を解説した上人からはじまる瑞泉寺の縁起や、戦乱の中で土塁の抜け穴を敵に教えてしまったおばあさんの話、松尾芭蕉の最後の門人となった青年俳人浪化など、歴史や伝説が生き生きとよみがえります。

この一冊
祭り囃子がきこえる
 川上 健一 / 著 集英社文庫
 ハートウォーミングな八つの短編からなる祭り囃子が呼び起こす優しい記憶の物語。八尾おわら風の盆も舞台として描かれ、情緒あふれる祭り囃子に、誰もが心地よい郷愁に誘われます。

審査委員会委員

委員名	所属等
<委員長> 中井 精一	富山大学人文学部教授
伊東 真	富山県立図書館長
桑嶋 一彦	県中学校文化連盟新聞・文芸専門部代表 (富山市立西部中学校教頭)
腰本 公彦	県高等学校文化連盟写真専門部会 (富山高等学校教諭)
笹林 一樹	高志の国文学館副館長
寺田 孝子	県中学校文化連盟美術専門部代表 (高岡市立牧野中学校教諭)
寺田 允美	県高等学校文化連盟文芸専門部会 (富山国際大学付属高等学校講師)
橋本 文良	高岡市美術館副館長
柳原 正樹	富山県水墨美術館長
山村 泰雄	県高等学校文化連盟美術・工芸専門部会 (高岡高等学校教諭、県高等学校文化連盟事務局長)
木村 博明	県教育委員会生涯学習・文化財室長

応募状況

応募総数 1,608点 (文芸 1,427点、美術 109点、写真 72点)

	部門	文芸				美術			写真			総計	
		校種	散文	詩	短歌	俳句	部門計	デザイン	絵画	部門計	単写真		組写真
応募数	中学校	14	8	12	26	60	1	2	3			0	63
	高等学校	157	52	466	692	1,367	3	100	103	62		62	1,532
	特別支援学校					0		3	3	10		10	13
	総計	171	60	478	718	1,427	4	105	109	72	0	72	1,608
入選	知事賞	1				1		1	1	1		1	3
	金賞		1(1)	1		2(1)		1	1	1		1	4(1)
	銀賞	2	1	1	2	6		3	3	3		3	12
	銅賞	1	4(2)	3	2	10(2)	1(1)	4	5(1)	5		5	20(3)
	佳作							1	1				1
	入選計	4	6(3)	5	4	19(3)	1(1)	10	11(1)	10		10	40(4)

() は中学生で内数

平成25年度「高志の国文学」情景作品コンクール入選作品一覧表

○文芸部門 (散文・詩)

賞	題名	分野	学校	学年	名前	題材
知事賞	死と向き合う 「納棺夫日記」を読んで	散文	富山中部高等学校	2年	加藤 瑞希	納棺夫日記
金賞	悠久のふるさと ～223首にこめられた富山の自然(さち)～	詩	滑川中学校	1年	吉森 優菜	「萬葉集」より大伴家持が詠んだ歌
銀賞	「風はどこから吹いて来る」をよんで	散文	富山中部高等学校	2年	瀧 萌香	高校生のためのとやまの文学 風はどこから吹いて来る-伏木中学校の歌-
	光	散文	魚津高等学校	1年	松井 亜莉沙	蛍川
銅賞	変わらないもの	詩	富山高等学校	1年	高柳 怜奈	越中万葉歌 (巻17-4000)
	祈りの先	詩	中央農業高等学校	3年	柴草 美桜	立山信仰の世界『富山の知的生産』
	大人になるために	散文	小杉高等学校	3年	津幡 実央	大人になる前に身につけてほしいこと
	千三百年の景色を	詩	伏木中学校	3年	嶋川 華乃	万葉集
	因果	詩	中央農業高等学校	3年	村上 奈穂	立山信仰の世界『富山の知的生産』
	あわれな町	詩	和合中学校	1年	冬木 翔大	富山大空襲・戦争当時体験記

○文芸部門 (短歌・俳句)

賞	題名	分野	学校	学年	名前	題材
金賞	いのちの乱舞	短歌	富山高等学校	1年	林 聡美	蛍川
銀賞	剣岳に挑む	俳句	富山高等学校	1年	神島 寛也	剣岳<点の記>
	とべないホテル	俳句	富山高等学校	1年	沢田 泰地	とべないホテル
銅賞	蛍火も束の間	短歌	高岡西高等学校	2年	宮原 優香	蛍川
	永遠の欲望	短歌	中央農業高等学校	3年	栄 真咲希	立山信仰の世界『富山の知的生産』
	私たちの宝物	俳句	高岡西高等学校	1年	高野 未来	ほしのふるまち
	地球の未来	俳句	魚津高等学校	1年	中野 啓太郎	富山湾を科学する
	ひかり	短歌	高岡西高等学校	2年	前原 彩佳	とべないホテル
	剣岳	短歌	富山高等学校	1年	横山 裕子	剣岳<点の記>

○美術部門

賞	題名	分野	学校	学年	名前	題材
知事賞	万葉を想って	絵画	高岡支援学校	2年	磯部 遥	万葉集
金賞	立山の恩恵	絵画(水彩)	富山中部高等学校	2年	橋場 圭	おおかみこどもの雨と雪
銀賞	山崎カール	絵画	富山北部高等学校	1年	佐渡 涼子	富山県謎解き散歩
	立山の夏の雪	絵画	志貴野高等学校	2年	清水 香帆	万葉集 (巻17-4004)
	真夏の浪漫	絵画	富山北部高等学校	2年	早崎 瑞月	凜々と
銅賞	何かが始まる場所	絵画	富山北部高等学校	1年	浅野 美穂	ほしのふるまち
	蛍川	絵画	小杉高等学校	2年	河崎 希実	蛍川
	事をなすために	デザイン	出町中学校	3年	境 佑莉	神通川
	ふたり	絵画	小杉高等学校	1年	高田 康平	蛍川
	自然豊かな富山の朝	絵画	富山北部高等学校	1年	山崎 美友奈	おおかみこどもの雨と雪
佳作	古里の風景	絵画	富山北部高等学校	1年	松井 映里香	飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ

○写真部門

賞	題名	分野	学校	学年	名前	題材
知事賞	輝射しーきざしー	単写真	南砺福野高等学校	2年	稲垣 ゆりあ	詩集 雪道
金賞	森の目	単写真	富山東高等学校	2年	木林 瑞貴	とやま面白学・富山の自然再発見
銀賞	写生の日	単写真	高岡第一高等学校	1年	沖野 翼	街道をゆく4
	文学少女の夏	単写真	富山東高等学校	2年	亀沢 美葵	越中讃歌
銅賞	曳山に乗って	単写真	富山高等学校	3年	飛弾 彩葉	風のまにまに
	光の影	単写真	富山東高等学校	2年	大崎 栞	蛍川
	幻想	単写真	富山東高等学校	1年	鴨島 舞	納棺夫日記
	清流の里	単写真	高岡第一高等学校	2年	島 彩香	祭り囃子がきこえる
	家族	単写真	高岡第一高等学校	1年	橋本 花菜	街道をゆく4
	井波のリズム	単写真	高岡第一高等学校	1年	宮城 健生	瑞泉寺と門前町井波

表彰式

日時：平成25年11月6日(水) 場所：高志の国文学館



受賞者の皆さん

入選作品展示



第18回富山県中学校文化祭
平成25年10月13日(日) 富山県高岡文化ホール



第25回富山県高等学校文化祭
平成25年10月26日(土)～28日(月)
富山県民会館



富山県立図書館
平成25年度「高志の国文学」
情景作品コンクール入選作品展
ふるさとの魅力を知る
平成25年10月29日(火)～11月24日(日)

高志の国文学館

KOSHINOKUNI Museum of Literature



高志の国文学館は、富山県ゆかりの作家や作品の魅力を幅広く発信し、誰もが気軽に文学作品や、絵本、映画、漫画、アニメなど幅広い分野の「ふるさと文学」を気軽に楽しみ学ぶことができるとともに、新たな創作への刺激ともなる場でもあります。

開館時間 午前9時30分から午後5時まで
(展示部門) (入館は午後4時30分まで)

休館時間 火曜日(祝日を除く)、祝日の翌日、年末年始

観覧料 常設展示観覧料/一般200円、大学生160円【高校生以下無料】

詳しくはHP [高志の国文学館](#)

検索

高志の国文学館を訪問して、
きみも作品を
創作・応募しよう!



所在地
〒930-0095
富山市舟橋南町2-22
TEL 076-431-5492
FAX 076-431-5490